様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３０日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2008～2010
課題番号：２０５２０３５７
研究課題名（和文）対話能力発達における身体性表現の役割
―言葉と体と音楽が出会うところ―
研究課題名（英文）Contributions of embodied expressions to the development of communicative abilities, where language meets body and music
研究代表者
有働　眞理子（UDO　MARIKO）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：４０１８３７５１

研究成果の概要（和文）：
特別支援学校の授業で教師が発話するオノマトペ表現においては、運用時の韻律とリズムが身振りや動作と連動することが発信効果を高め、教育的発話意図が効果的に知的障害児童に伝わり、教師−児童間の対話が促進されることがわかった。

研究成果の概要（英文）：
Observing onomatopoeic utterances by teachers in special school classes, the prosody and rhythm of their utterances, together with the teachers' expressive gestures, contributed to the effective transmission of teachers' educational intentions, which evoked teacher-pupils communication.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：対話能力発達、知的障害児、音声・談話分析、オノマトペ、韻律、リズム、ジェスチャー、発話意図

１．研究開始当初の背景

対話能力発達における身体性については、オノマトペという言語カテゴリーに言語研究の関心が集まり、オノマトペ語彙の豊富な日本語を通して認知科学的研究が活発に行われる状況があった。得に、言語学においては、豊かな表現性の背景にある形式的特徴を特定することに、心理学においては、オノマトペ語彙の使用状況と発達の関わりに、多くの関心が払われて来た。本研究では、この両方の視点をつなげて、運用状況から見えるオノマトペの特質や、オノマトペを使用した対

話行動の特徴について考察し、オノマトペという言語カテゴリーそのものについての知見のみならず、オノマトペ研究を通して、対話や対話能力の発生にどのような原始的な力が必要とされるのかについての手がかりを得ることに重要な意味があると考えた。

２．研究の目的

本研究は、知的障害児の日常の対話場面、特に、学びの場である特別支援学校教室の授業観察に基づき、対話行動活性化に、身体性表現がどのように関与するのかを考察し、そのことから、対話能力がどのように促進・獲得されるのかを考究することを目的として実施された。特に、オノマトペや感動詞のような、韻律により表情豊かに運用・表出される言語表現の運用状況を詳細に観察することにより、音声言語表現とジェスチャー等の運動表現がどのように連動するのか、さらに、その言語表現行為に込められた対話行動的意義とは何であるのかについて、言語学と医学という異領域的視点による観察結果をすり合わせて、比較検討・吟味・考察した。

３．研究の方法

知的障害児の言語生活の場である特別支援学校の授業実践の様子を見学させていただき、収録された音声映像情報に基づいて、音声分析、会話分析、ジェスチャー分析の手法を統合して、障害児教育学や発達科学、認知科学の先進的な理論を参照しつつ、対話現象の解釈を試みた。

2008 年度は、前年度３月末に実施した韓国の養護学校見学時に採取した映像資料について、特にオノマトペが多用されている授業場面のビデオ起こしを行い、その資料を、韓国語から日本語に翻訳する基礎作業を実施した。映像記録分析により、養護学校の教室という場の対話性の豊かさについて、より信頼性の高い現象記述が可能となったので、さらに、SUGI Speech Analyzer などの音声分析ソフトや、 Photoshop Elements6.0、ペンタブレット Bamboo MTE-450 などの画像処理ソフトなどのツールを新たに用いて、音声・運動情報の客観性の高い記述を試みた。

2009 年度（2 年目）は、オノマトペ表現そのものを言語教育教材に積極的に組み込んだ授業場面について観察・分析・考察した。そのために、近畿圏の特別支援学校の重度重複障害児童のクラスに、2 週間に 1 回程度の頻度で計数ヶ月､1 回あたり 1～2 時間の授業観察に通い、映像記録を採取し、担当教師と意見交換等を行なった。

最終年度となる 2010 年度（3 年目）は、2008 年度の成果（韓国のオノマトペ表現の分析、日本の特別支援学校の授業観察)、及び 2009 年度の成果（日本の特別支援学校の授業場面で用いられるオノマトペ表現の調査・分析・考察）をふまえて、より普遍性の高い考察としてまとめ、国際会議も含めた成果発表を通して、分析の適切性を検証することに研究の重点を置いた。

４．研究成果

2008 年度は、特別支援学校授業の観察を通して、知的障害児たちに向けた教師の発話行動の中で、発信性の高さにおいて際立っていると認識された発話行動要素を取り出し、その特徴を記述し、表現された形式の特徴が、発話行動の動機や目的（談話機能）に、どのように関連づけられるかを考察した結果、対話能力に制限のある知的障害児たちに対峙する教師は、対話の意図や発信内容を子どもに伝えるために、音声表現と運動表現が効果的に調和する対話行動を示している状況が明らかになった。これらの観察・分析結果に

ついては、日本発達障害学会（2008 年 8 月）、日本認知言語学会（2008 年 9 月）及び日本特殊教育学会（2008 年 9 月）において学会発表を行い、論文集等にも投稿した（2009 年 5 月に日本言語学会誌、2010 年 7 月に日本特殊教育学会誌に採録）。また、韓国の養護学校の記録を整理し、次年度からの調査分析の要点をまとめる意味でも、調査結果を中間報告として冊子にまとめた（2009 年 3 月）。また、国内の特別支援学校についても、近隣府県の養護学校二校において授業見学を実施し、オノマトペ的な要素を豊富に取り入れた言語活動が行われており、その後本研究の本格的な展開を支えることとなった。

2009 年度は、記録の中で特に、積極的な教師の働きかけ／声かけと児童の活発な反応が響き合っていると思われる対話場面を取り出し、教師発話の音声的特徴の表現効果についてより詳細に考察した。特に、発話に随伴する身体的特徴（表情、身振り）や、周囲にいる他の教師との相互行為などが、発話の意図を有機的かつ効果的に伝達する状況に気づき、その現象や構図を概念化することを試みた。特に、教師の発信した身体性表現の有り様（運用状況の音声的特徴）と、その表現が促進する対話交換の文脈（特に教師の教育的な発話意図）の関連性については、相互作用があるという仮説に基づいて分析考察を行った。国内特別支援学校のオノマトペに特化した授業の分析結果については、日本特殊教育学会（2009 年 9 月）、日本発達心理学会（2010 年 3 月）において成果発表を行った。

最終年度においては、オノマトペ表現の音声的特徴と対話意図・機能の関係、オノマトペ表現に随伴するジェスチャーの特徴と対話機能との関係について考察し、さらに、様々な制限・制約を持つ知的障害児と、教育を担う教師の間で、観察された音声や身振りの相互作用が、どのような形で対話を発生させ、成立しているのか、即ち、身体性の高い言語表現がいかに対話を活性化・促進しうるのかという、本研究における最も重要な問いへの手がかりを求めて、詳細に考察・検討を行った。その結果、オノマトペ表現が使用される状況は、一定のパタン化・分類が可能であり、教室という教育的文脈に特有の対話の構図が見られることがわかった。そして、そこで用いられるオノマトペ表現が持つ発話意図が、音声表現と身振り表現の絶妙な調和によって、より効果的に相手に伝わる様子が明らかにされた。教師発話の韻律とリズムが、ジェスチャーや単純な身体動作と連動することで、音声信号が視覚化される効果を生み、しかも、合図や指示、寄り添いなど、日常的に障害を抱える子どもたちへの働きかけに必要な、それぞれの対話機能に沿う相互作用の関係があることが観察された。これらの結果については、国際ジェスチャー学会（2010 年 7 月）及び国際知的障害研究学会（2010 年 10 月）という二つの国際学会、及び日本特殊教育学会（2010 年 9 月）において、3 年間の研究のまとめとして発表を行った。

本研究を立ち上げるにあたっては、対話能力発達を目指す子どもたちのために役立つ研究でありたいという、社会貢献的目標が根底にあり、年度末にそのための研究会を開催した。実施にあたっては、特別支援学校に深く関与し、障害児支援に特化した別の研究プロジェクト（科学研究費補助金基盤研究（C）「特性に応じた対話環境を重視した障害児支援」：課題番号 21610012）の研究代表者でもある本研究分担者高野と共同で、「ほんわかしてハッとする研究会」を立ち上げた。この研究会は、将来的に、本研究で行なっているような学術理論研究を、障害児・者の教

育・療育に役立てていくために、研究者と教育・療育実践者が交流しながら、現場のニーズに研究成果を応用する試みを協同で学び、応用実践していくための場となるものである。その第一回目として、特別支援学校校長・教師や、知的障害者のケアに携わる人々を交えて、3 年間の研究成果の要点を紹介し、それに基づいて活発な議論を行なった（2011 年 2 月）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 高野美由紀、有働眞理子 、特別支援学校のティームチングに見られるインターラクション、兵庫教育大学研究紀要、査読無、2010、第 36 巻, pp.53-60

② 高野美由紀、有働眞理子 、養護学校の教師発話に含まれるオノマトペの教育的効果、特殊教育学研究、査読有、第 48 巻第 2 号、 2010、pp.75-84

③ 有働眞理子、高野美由紀 、オノマトペ的表現と対話能力発達の関わりについて―日韓養護学校の授業における運用事例観察を通して―、日本認知言語学会論文集、査読有、第 9 巻、2009、pp.298-308

〔学会発表〕（計９件）

① Takano, M., Udo, M., 'The communicative and educational effects of onomatopoeia in teachers' utterances in special schools', the Third International Conference of IASSID-Europe, October 2010, Torre Rossa Park Hotel, Rome, Italy

② 高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校における教師と児童のインターラクション：重度・重複児の反応に言及する教師発話・表現の分析、日本特殊教育学会 48 回大会、2010 年 9 月、長崎大学文教キャンパス

③ Udo, M., Takano, M., 'On embodiment of onomatopoeia: Its cognitive developmental implication', "*gesture : evolution, brain, and linguistic structures*", 4th conference of the international society for gesture studies, July 2010, European University Viadrina, Frankfurt/Oder, Germany

④ 高野美由紀、有働眞理子、特別支援学校のティームティーチングに見られるインターラクション（２）、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月、神戸国際会議場

⑤ 有働眞理子、高野美由紀、オノマトペ表現の韻律がもたらす共振と共感―知的障害児の対話活性化に向けて―、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月、神戸国際会議場

⑥ 高野美由紀、大川まみ、有働眞理子、特別支援学校のティームティーチングにみられるインターラクション、日本特殊教育学会第 47 回大会、2009 年 9 月、宇都宮大学峰キャンパス

⑦ 有働眞理子、高野美由紀、 オノマトペ的表現と対話能力発達の関わりについて―日韓養護学校の授業における運用事例観察を通して、 日本認知言語学会第 9 回大会、 2008 年 9 月、名古屋大学東山キャンパス

⑧ 高野美由紀、有働眞理子、韓国の障害児教育におけるオノマトペ第 1 報：身体動作・ジェスチャーを意識した授業観察を通して」、日本特殊教育学会第 46 回大会、2008 年 9 月、米子コンベンションセンターBIGSHIP

⑨ 高野美由紀、有働眞理子、養護学校の授業に見られるオノマトペ的要素―第３報：オノマトペを含む教師発話のカテゴリー分類の試み―、日本発達障害学会第43回大会、 2008年8月、明治学院大学白金キャンパス

６．研究組織

(1)研究代表者

有働 眞理子（UDO MARIKO）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：４０１８３７５１

(2)研究分担者

高野 美由紀（TAKANO MIYUKI）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：７０２９５６６６